

歌合

嘉吉三年二月十日(前照政家歌合)

六十七

云般

百十七番

左

正徳



あきみや本を鬻ひもく病とおこまきて歸れゆくら年

右

大傷邪

葉うてまく花となり日やおひ聲をあはせを

左

わきまくらや

百十八番

左

為李朝臣

海や帰れ日うひとはとむさす山はあら葉すそり

右

時繁

うれ井戸を風ひのむちあひわらを帰れ夕暮

右

岡山秋葉雖有淺深之色兩篇詞花難決勝

頗る思

百十九叢

左

法下堯考

婦をまかねば音めとまわせゆすち吹きちをあつのみ

右

入道二位

夫をもせれかも身とあまれもとせく身と身と身と身と身  
虎奇婦をまよ強れ事すしもとせゆと身と身と身と身と身と身  
正海百首之類  
ノイヒハ秋ハムサ  
山がくは春ハムサ  
絶のひより

又婦志うふゆすりうちかくる作例も候ふ  
あそ衣哥の汲下流而は上者三千餘家食  
日精而駐年 頭者五万箇歳とふくめやつ  
生もたゞみ難ろく候毛とたひお紫乃色と  
可ト子うそめまく候ひみや

石サ音

左

入室

こゑもま尾むりと身婦の移くゆふ乃す傳すううううなう

養成胡臣

称えしてよめな月は玉明か身はははがまかまともとてあ  
君は也月れ玉明よりじむもゝとれ婦はま  
いへそくあらんしもまうう候ひめや

而サ音

左

小宰相

君代をなせな月は玉めうい酒やうともとま候れ

常秀

う紀わせなあもつふ婦はげもとれ、行はまは月れ  
虎右長月或は云或は歌性情之吟詠詠區

欽頤善名未彰

石林二集

九

持絕

左  
權少傳都 宋我

擢少傳郎 家我

左の如きは必ずちとけあつ事とこのめ  
りあまうれしあともあそみ承せ寄会ふも款、  
ちてみ櫻集うくもと此頃の作をう廻ひま發  
はくとや 作しとる家彌ハナが用意ある  
支度すとや作り右志川もとあいは七月又  
ねくまちとゆきはく勝負をゆく

石林子集

野々

外山はまくまくはうな月乃すを野をうすてお志  
可衣 擧太傍都實政

トハ鹿は契めどもおもへぬかきくやうか野を駆け  
ましにのうな月とそむき事野とそもてうちあ  
れづるたゞさくらむけり又契めどもおもひ  
まくらむけりおなふ野色乃草すなと  
侵小竹や又えもん庵ておお

百廿四

九

從三位仲方御

中華書局影印

持房

おれももうあとでまた来るよ。それで、それ

百廿五卷

成前宿称

あくまでまじめな物語がお君と兄弟まで原題も付

七

宣德

左紫菊白芳露上寒月右紫菊色深山下秋崖者述其志又在同科

卷之三

盛長朝

卷之二

卷之三

なきよかく仰てあきらんも月はがくとくわあ／＼を  
たまえのう／＼を／＼を／＼を／＼を／＼を／＼を／＼を  
くまえ仰て右ハ仰てあきらん人そそに  
そつはあきらんとそそに／＼旅恒が／＼す  
のつがゆ／＼と車子は／＼とよありあきら  
な／＼や仰し又いきれ／＼我人れあり／＼  
みまわき仰／＼たお／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と  
身旅れとまじれ／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と  
身／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と  
りや仰／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と／＼と

百廿七番初章

九

女房

かくもあまうきやくわくの娘をあつめにゆく

右

小宰相

左  
右等の内にうちありぬえとみ聞やくがうと侍  
たれりんの御く右角のあをめや右寄勝(さ)  
たもて、わくはましゆくはく

百サ審

た

持純

多筆付松葉(ま)木義(きよ)え(え)日(ひ)けめめあ(あ)ニ

右

持和朝(ま)

左清浦胡(ご)奇(き)多(た)か(か)きの(の)お葉(は)れ(れ)の(の)  
手(て)病(び)と(と)月(つき)れ(れ)ケ(け)乃(の)や(や)ま(ま)く(く)仰(あ)く(く)  
け(け)ア(ア)か(か)ひ(ひ)仰(あ)く(く)や(や)右(う)寄(ぎ)ハ(ハ)浦(うら)氏(うら)氏(うら)乃(の)

笠(かさ)れ(れ)草(くさ)を(を)か(か)り(り)草(くさ)れ(れ)る(る)な(な)ま(ま)つ(つ)て(て)  
て(て)ま(ま)で(で)竹(たけ)と(と)か(か)の(の)あ(あ)の(の)羽(は)み(み)神(じん)年(ねん)月(つき)十(じゅう)あ(あ)すと  
竹(たけ)と(と)御(ご)笠(かさ)と(と)く(く)お葉(は)み(み)草(くさ)よ(よ)う(う)ち(ち)と(と)輝(き)  
あ(あ)い(い)も(も)あ(あ)波(なみ)り(り)く(く)竹(たけ)と(と)竹(たけ)と(と)竹(たけ)と(と)竹(たけ)と(と)  
め(め)れ(れ)き(き)の(の)み(み)御(ご)れ(れ)い(い)わ(わ)く(く)の(の)あ(あ)き(き)や(や)み  
竹(たけ)と(と)や(や)く(く)竹(たけ)と(と)竹(たけ)と(と)竹(たけ)と(と)竹(たけ)と(と)竹(たけ)と(と)  
キ(キ)ア(ア)ち(ち)と(と)て(て)あ(あ)り(り)勝(かつ)廣(ひろ)と(と)け(け)く(く)勝(かつ)  
ち(ち)と(と)東(とう)庵(あん)院(いん)れ(れ)い(い)幸(こう)年(ねん)補(ほ)年(ねん)月(つき)  
と(と)す(す)られ(られ)壁(かべ)の(の)毛(け)竹(たけ)の(の)ふ(ふ)き(き)は(は)ひ(ひ)見(み)  
未(み)は(は)む(む)れ(れ)毛(け)竹(たけ)の(の)ふ(ふ)き(き)は(は)ひ(ひ)見(み)む(む)れ(れ)か(か)  
六(ろく)事(じ)院(いん)の(の)り(り)表(ひょう)は(は)三(さん)筋(すじ)み(み)む(む)れ(れ)か(か)

おひいてらるを思ふよすれども、  
ゆくゆむれりにわく、此内とこの十、うりな  
らきちみれり、うよまよの御くわせぬ  
えでゆねやこわく、うりてゆくよめふ  
あくのゆくとせじて青海波れた  
りおり、川

又朱雀院北四奇

妹まで嘸あらゆる所へかき詰め様子を記叙  
され二哥みむくの弟在院の出来とまく  
妹れ者よりよもねりされ六多忙乃ひあと  
居て神無月廿日あまりお紫れさうると見え  
候ふやうそれもみこれ妹れり者の中、み

ノルトモリテヨリカレリ川口  
アガルテシの所音ハテシム十月ニキサニ  
サガシシヒトモシヒタルサシルタクサキシ  
アラク所音シモシカシムホムクサリトモ  
ナリシテシテシツル御前ノサシキモハ  
サシルトモシヒキシハナリトモシヒ  
モトモシカシルトモシヒ  
ツモト初々歌シモトモシヒ  
シモトモシヒ  
アリセシムカシルトモシヒ  
入シモシシル所音シモヤセキシモシヒ  
ナリモトモシヒ

石林集

九

持房

あこがれのあらうとばはれをかくか月日

右

從三危中古鄉

ちうがまどりあぢみをしるるの事は、御子の御心事、御心事の御心事  
たれあとひが勝劣と修歎也。在北五事、  
そいへうなづくうきぬ。西山もこゝへ修歎

卷之三

九

迎清

卷之三

A  
20

卷之三

卷之三

とあつて奇合すが所ありといひに心痛  
筋もふ叮、傍りぬや左肩松遺意疊意  
てゆく筋はかくすみとくすむじうりとゆく  
の筋もうちもと傍りぬや左肩松遺意疊意  
筋

而立一書

權大納言

林書月志之雲北之

卷

をと名めどもうそをかね月婦を志す  
た奇才をもつてくわううきめあらそ  
うれしき御みゆきおほはうや又角  
のをもんじれしむせぢく様人にはまううる

希生をひし、おほえゆう右寄をみとる  
かたとそし候ふううやなきつゝ持  
ゆくれ作

石井二盡

左

中納之

志氣あまむれ松原みゆき先づきまくとがとうかす

右

成而易称

すち業ゆまとばつてももくらん林育すせぢめにま  
危寄ハ船引胡坐アキヤマセのうちうちうちうち  
き川ノ志ミカクルトオトモウシメリケルシムサ  
ルノ右寄ハ善称好思ナムサモリテ、  
人ノ思ノ林育無月ノ御事未かれと往る  
トヨリハあらじ日數ナムハヤケルシ作

車寄と文字はとひてかりぬすよきく處  
てそれ寄乃ねといひ生れ能作みとを又  
ハヒ神ナリモちば細ハコトシラシテ  
てちの河城門ちよふ事比作り給寄  
全主と大統系ればと名つけ作り也生育  
比之いはきもつては神也作

石井三盡

左

參義之

志氣あまむれ松原みゆきやなきつ  
危寄常生及をもみゆきを右寄寒守綱

右

大傍都

ちの車寄と成りては神育すゆく事  
危寄常生及をもみゆきを右寄寒守綱  
寄すちの河城門の神ゆくもととす

さうやまくもくふこうへと行ひゆる羽衣  
えみやや仍又あわわ

百葉書き

た

経済

おれゆうあをとすよどりひきてねま縛

右

豊長羽衣

な月とみゆの風乃りよまげりうれ留め  
左右乃あうれいはせよまきうわにかく  
竹り左寄つづりのよともいはれよまがく  
ありあすりや

百葉書き

た

定衡

ゑくや志すと雲はをぬよ青くとくとちる本はれ

右

入室

おちまむかとぞはのきとあとおひよくとまくとまく  
青くとくとくとてちるあは葉すりもおひよく  
くま乃ちと草をいそりう見えまちゆるお右  
御お竹の角

百葉書き

た

入通二位

木下ととひはうて次せよとのみゆをとと事

時蟹

おいかわいし蟹がみ乃他の尾、まほとてあらむ他  
左寄、海魚粒核致寄、害をとれといけて  
とよぶ筋ゆびねじて、月はるか耶右  
寄、五魚二右寄、ゆくありとけよ

志うれしあしまいぬ婦れなうすと仰  
ゆる御おがくさあややあうき用數までにほ

じや作

石巣事

た

擔か傳教家我

そのまきみをねくをもとぢぬまのうかくまを

右

權力傍近宣政

可車輪くわゆう補育婦れもり乃庭れ此年  
在はあくいきのうきをめぐらむ北在のあ  
ハ婦の名姓れこれ年とさくよ津深いはれと  
ゆき免そくや作

石巣富

た

氏教

タまくれきくぬの御の御まくはれ弟妹もあと事

右

為多朝臣

は接や 皆子孫

浦あくもあくそくとねくれ月志うれとさくう達  
石あくとくちくぬゆゆう入そかくとそく  
おひはくとこきふよやくとくわくとからくる  
家とくの竹ねむとも、くとくおはえ竹れ又  
まくれと竹れとせき、けりみてとあふ事  
キサヤ右、林うねくりみつてやくすを  
くねうれ奇びるはゆやけん情、めでて  
ソヒキモソヒキもあくとくふくら骨、を

石巣富

七

常秀

卷

西徵

賀脣角筋本の事と云ひてあつとうむ乃  
右  
西徽

卷之三

左近清中行

東京の事務所にて  
吉田松風

卷

清平樂

月あは葉をそのうめいがふく霜の  
やや右寄らうとゆき又いそぎの  
川の河岸乃がさだらとやまの傍  
うみ波は葉を竹とちくわく  
松

石罕一書

文房

左 持房

卷

持房

聖教のよん／乃まうと寛平比ひうり  
もすきはやめにあく細川直義會  
ゆく住むいかみてゆかとくく源氏を  
かじきもみよ／まとてのよみ山あ井

も死ふとアヒアトトモシム相ヒテ原  
さと川源時ヒ奈比井ノちとモビ袍行ヒ  
文武モシムアキナキアリ左山ア井比神モタクの  
中とツテ作リ一リ松叶腰腹をもひきシ  
足えわれ作リぬとモトム左山アモウ作ノ作  
をかとモトモ腰よがきれ作リムアモトモアモ

石罕ニ書

左

左近米中將

アキナキトモアキナキシマ子アモトモムシム雲七  
右

右唐猪

アキナキモアキナキシムトモアキナキヤ望シ乃モ取  
たれ雲のアキナキアキナキモトモ乃胡々狂  
のアキナキモトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキ  
即チテ此處モアキナキモトモアキナキモトモアキナキ  
アキナキモトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキ  
アキナキモトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキ  
アキナキモトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキ

石罕ニ書

左

迫衛

多言モ神威金光の拂葉アキナキモトモアキナキ

右

中納主

アキナキモトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキ  
モトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキ  
モトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキ  
モトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキ

石罕ニ書

左

大房故

アキナキモトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキ  
モトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキ  
モトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキ  
モトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキモトモアキナキ

右

小宰相

ねきひよ中  
知つてふくらむのゆ

うよかまそとよきしゆくとぬかちやかばうとせはれせたる  
いたはれどく作りたるい花をばせばた  
ふややくへし事後中附ましゆきまくがよ  
うのあま月一とよきし竹へ中をれちとくまく作  
あきづく題のあらかじもうあや竹  
石室もあ

左

經濟

雪れりともあやあけゆしとくふあつかをゑすとく骨

右

未成竹

をとせあるゝ袖つとせふひきまく雪半力を。せとせと  
數半のととめうつとせとせとせとせとせとせとせと  
うひぢつてやあふと思ひしと向原代わく  
のあとととととととととととと

石室もあ

左

津下亮春

まよまよ神れどくとくまよまよまよまよせせ

右

お純

ちとそとく引手と拂とれとすとせとせと  
たの奇とくにとまつてとまつてと拂とく御親うつ和と  
まつてとくもあすいといとれ又後村胡の  
きあきれそりとくぢとせかとくとくと  
すとまてとくとくとくとくとくとくとくと  
ありてとくとくとくとくとくとくとくとくと  
はととととととととととととととと

右奇奉と稀との中で、之の事は  
まことに御月せられ仰りつらふれども此  
葉をぢにあらや御るふる御れと仰れ  
を彦歌セヤがと仰くま左辱清主の  
事セヤナリきしむるもあはれ仰ぬ

石室を書

成前扁林

左

權右納

さうに葉子と御月せられ仰り  
たるもと石室を墨れ左奇の仰りす  
ひつゆの仰りかと仰りし在ありしゆを  
ほつてゆりゆまなまつておと

石室を書

左

従姫仲方御

ちまむまもまめあらうととある。神かりゆくこゆくはま  
右

入室

かねづかともちもちの仰りあれどりの神乃くま  
た神ありけれんけられも又多くれありと  
石室ふくらひあらうとまちく仰り在りかくもと  
仰り葉りの神乃かつてふくめやとま  
そそきけまとぢび左奇  
みよき勝とせり

石室を書

入道二位

左

神をさするに以て河をまよひぬはうとて五七度  
右

三級

不<sub>の</sub>うとれ<sub>う</sub>そも  
不<sub>の</sub>うとれ<sub>う</sub>そも  
ひとれ<sub>う</sub>そも

森<sub>の</sub>葉<sub>の</sub>かく<sub>の</sub>め<sub>の</sub>を<sub>の</sub>ま<sub>の</sub>と<sub>の</sub>て<sub>の</sub>お<sub>の</sub>は<sub>の</sub>ふ<sub>の</sub>を<sub>の</sub>乃<sub>の</sub>中<sub>の</sub>川<sub>の</sub>乃<sub>の</sub>而<sub>の</sub>  
左<sub>の</sub>と<sub>の</sub>あ<sub>の</sub>つ<sub>の</sub>風<sub>の</sub>河<sub>の</sub>と<sub>の</sub>い<sub>の</sub>は<sub>の</sub>あ<sub>の</sub>う<sub>の</sub>め<sub>の</sub>や<sub>の</sub>御<sub>の</sub>神<sub>の</sub>作<sub>の</sub>さ<sub>の</sub>い  
て<sub>の</sub>ミ<sub>の</sub>あ<sub>の</sub>く<sub>の</sub>行<sub>の</sub>り<sub>の</sub>右<sub>の</sub>ち<sub>の</sub>り<sub>の</sub>う<sub>の</sub>き<sub>の</sub>北<sub>の</sub>中<sub>の</sub>内<sub>の</sub>乃<sub>の</sub>水<sub>の</sub>れ  
か<sub>の</sub>れ<sub>の</sub>る<sub>の</sub>り<sub>の</sub>森<sub>の</sub>か<sub>の</sub>む<sub>の</sub>ひ<sub>の</sub>も<sub>の</sub>ほ<sub>の</sub>し<sub>の</sub>ま<sub>の</sub>し<sub>の</sub>れ<sub>の</sub>と<sub>の</sub>と<sub>の</sub>つ<sub>の</sub>き<sub>の</sub>か<sub>の</sub>と<sub>の</sub>み<sub>の</sub>と<sub>の</sub>め<sub>の</sub>る<sub>の</sub>け<sub>の</sub>半<sub>の</sub>身<sub>の</sub>や<sub>の</sub>左<sub>の</sub>  
右<sub>の</sub>い<sub>の</sub>つ<sub>の</sub>ま<sub>の</sub>あ<sub>の</sub>す<sub>の</sub>い<sub>の</sub>け<sub>の</sub>免<sub>の</sub>毛<sub>の</sub>く<sub>の</sub>ゆ<sub>の</sub>み<sub>の</sub>た<sub>の</sub>ん<sub>の</sub>れ<sub>の</sub>せ<sub>の</sub>り<sub>の</sub>望<sub>の</sub>む<sub>の</sub>  
は<sub>の</sub>あ<sub>の</sub>み<sub>の</sub>森<sub>の</sub>乃<sub>の</sub>ま<sub>の</sub>れ<sub>の</sub>ひ<sub>の</sub>み<sub>の</sub>や<sub>の</sub>な<sub>の</sub>も<sub>の</sub>も<sub>の</sub>を<sub>の</sub>

石室書

左

常秀

ま<sub>の</sub>も<sub>の</sub>す<sub>の</sub>神<sub>の</sub>と<sub>の</sub>乃<sub>の</sub>く<sub>の</sub>サ<sub>の</sub>め<sub>の</sub>を<sub>の</sub>ま<sub>の</sub>く<sub>の</sub>ぬ<sub>の</sub>ぢ<sub>の</sub>ひ<sub>の</sub>だ<sub>の</sub>き<sub>の</sub>庭<sub>の</sub>

捨<sub>の</sub>す<sub>の</sub>傳<sub>の</sub>放<sub>の</sub>家<sub>の</sub>我<sub>の</sub>

さ<sub>の</sub>ま<sub>の</sub>く<sub>の</sub>れ<sub>の</sub>め<sub>の</sub>あ<sub>の</sub>く<sub>の</sub>れ<sub>の</sub>ぬ<sub>の</sub>と<sub>の</sub>く<sub>の</sub>し<sub>の</sub>と<sub>の</sub>神<sub>の</sub>乃<sub>の</sub>う<sub>の</sub>笑<sub>の</sub>  
左<sub>の</sub>右<sub>の</sub>ち<sub>の</sub>み<sub>の</sub>幕<sub>の</sub>比<sub>の</sub>革<sub>の</sub>女<sub>の</sub>ぬ<sub>の</sub>め<sub>の</sub>か<sub>の</sub>と<sub>の</sub>て<sub>の</sub>若<sub>の</sub>も<sub>の</sub>ぬ<sub>の</sub>笑<sub>の</sub>  
月<sub>の</sub>と<sub>の</sub>し<sub>の</sub>岩<sub>の</sub>け<sub>の</sub>ぬ<sub>の</sub>月<sub>の</sub>と<sub>の</sub>し<sub>の</sub>神<sub>の</sub>比<sub>の</sub>ト<sub>の</sub>い<sub>の</sub>神<sub>の</sub>比<sub>の</sub>ト<sub>の</sub>い<sub>の</sub>  
月<sub>の</sub>は<sub>の</sub>ち<sub>の</sub>き<sub>の</sub>ち<sub>の</sub>と<sub>の</sub>竹<sub>の</sub>ぬ<sub>の</sub>や<sub>の</sub>

百<sub>の</sub>九<sub>の</sub>十<sub>の</sub>萬<sub>の</sub>

左

為<sub>の</sub>李<sub>の</sub>胡<sub>の</sub>左

又<sub>の</sub>か<sub>の</sub>野<sub>の</sub>き<sub>の</sub>あ<sub>の</sub>す<sub>の</sub>う<sub>の</sub>沙<sub>の</sub>と<sub>の</sub>み<sub>の</sub>せ<sub>の</sub>う<sub>の</sub>ア<sub>の</sub>は<sub>の</sub>り<sub>の</sub>萬<sub>の</sub>

右

權<sub>の</sub>大<sub>の</sub>傳<sub>の</sub>放<sub>の</sub>宣<sub>の</sub>政<sub>の</sub>

乃<sub>の</sub>ゆ<sub>の</sub>ふ<sub>の</sub>と<sub>の</sub>も<sub>の</sub>神<sub>の</sub>月<sub>の</sub>と<sub>の</sub>よ<sub>の</sub>あ<sub>の</sub>り<sub>の</sub>乃<sub>の</sub>ひ<sub>の</sub>う<sub>の</sub>可<sub>の</sub>

たるゝ野中をれどもよきれゆかは  
ちくゆうおきれといへれこととよき  
川北ひまに仁和二年十二月廿日之便  
わがうちれお野山に嘗て志りととて  
考せゆくと/or/如御入内の月は比慶  
内比繪みくらば土月あやまふ  
事比繪せしむれうちうめて沖々と  
みはくらとそよめゆる在すよれあうる舟  
をくらひいてゆる、まいをうく  
ほやえうのちれあまいまくわきゆく  
乃あくく勝劣がちくとくくわくやゆ

百五十二萬

氏教

右

時繁

かまく野を嘗てゆくとくゆをくらう内比繪  
右  
事比繪みくらひくとくゆは内比繪  
たるゝ春日高麗れあはれ、毛跡日耕うとく  
とも素骨れゑひ白かりとくゆや右ひみ井な  
先乃あとみゆりたとて耕れむとくおひ  
とくあやゆる

百五十三萬

塞長羽臣

左

朴音とくしゆがくや和ておきとくゆ

右

けゆふとくゆの月ナスカのりやおきわむ  
朴音とくしゆいゆとくゆ

やうのうと作例 何をこなすかね  
あやまつてあわ

而辛蜀

九

卷之四

代々の事務をもつてゐるが、それでゆう雲北のいち  
寺に明治

卷之三

卷之三

左近と申すが、かくの如きは、御多義の事なり。左近の如きは、かくの如きは、御多義の事なり。

定家と申すれどもあれはのぞれりねと  
云ふゆゑによしむらの姓あり

勝山集

丁巳正月

更衣すはれどもおまつり正あくに便り渡  
多羽作も哥倉作ともいふわれよま  
みよましに釋迦牟蓮などはやをゆく

卷之三

卷之二

布達奇ノ久松氏也

みのはら、か

とてアモリハアマリモルトコトヨ  
ノを取セキシタカサヤシマ乃寺の事  
トナシタカサヤシマ乃寺の事

卷之三

五十九歲後之

文房

ひつりもとゆ さわとひそめまく月の れむ

右

経清

あすまかまみむよひあひとひき年はててま  
流布年極多也

左寄の唐か教えまくあるゆゑもとまし  
紫木アハモモアリあうみソヒドセシ  
人比らひアリトヨウアキアビキムサギのセ  
作るそひトヨウアキアビキムサギのセ  
あもあや  
此書おとせり

百章十箇

左

なつかばくまのへとけ梅の香アラをあてやゆどやく

右

のくがまもんじんときよかすみのくに

左

左右文殊事又あわ

百章十七箇

大僧都

なめくじれひうばかりくら金持の病を

右

法下亮序

せん

まづはえきねがくまんのひうと南取と  
左寄の書年を落れらあくしゆとやしゆ  
右寄の書之うとあくとあくとをとめぬわ  
柄れむのけんまくうけいのゆく  
作るそ思ふゆまやまく一説の書之く

ゆくやもあくゆくうかうと、汝比寄みく  
きくゆくあくゆくうりうまれゆくみや  
まもゆくうんやられも又持くゆく

石幸十番

右瀧傳

うながれあえゆくのみあもく河解ナムトシテ  
右

迫瀧

あれの内をすくめきり瀧とくのまへえ  
左寄今比序みちもく河比附みは  
ふうえしもくえひとゆるんや右寄  
もくもくとくはくはくれとがくあもく川比  
うながみハくらすくあくまくめや

石幸九番

恭進

君望此あもくすをも、汝等のうもくがく年とく進む

右

中納言

まくわくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
た、ちこちれすとくのうもくうもくうもくうもく  
まくはくはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
れもくはくはくはくはくはくはくはくはくはく  
くやゆく

石幸十番

成朝

うそゆくうそゆくうそゆくうそゆくうそゆく  
うそゆくうそゆくうそゆくうそゆくうそゆく

右

うそゆくうそゆくうそゆくうそゆくうそゆく  
うそゆくうそゆくうそゆくうそゆくうそゆく

左守はさうめうみかこ左今の奇  
なつて右からくへるやうに家を病作り  
たゆつまゆつと

右六十一畫

た

常秀

左守はさうめうみかこ左今の奇  
なつて右からくへるやうに家を病作り

右

捨方納云

年守はなめぬらぬらぬらのり志原かうれんやはまく  
左守もいのふも左年守はくじとゆうも  
あくづくせきとくすとも左のまくらゆき  
て竹化けりやられりへたるくとく  
竹化けりとくはたとすもまきがみや竹

右六十二畫

た

ね和胡居

年守はなめぬらぬらぬらのり志原かうれんやはまく  
左守もいのふも左年守はくじとゆうも  
あくづくせきとくすとも左のまくらゆき

從三佐仲方居

年守はなめぬらぬらぬらのり志原かうれんやはまく  
左守もいのふも左年守はくじとゆうも  
あくづくせきとくすとも左のまくらゆき

竹化けりとくはたとすもまきがみや竹

右六十三畫

た

日守はなめぬらぬらぬらのり志原かうれんやはまく

右

入通二位

日守はなめぬらぬらぬらのり志原かうれんやはまく  
左守もいのふも左年守はくじとゆうも  
あくづくせきとくすとも左のまくらゆき

竹化けりとくはたとすもまきがみや竹

右

入室

其風又何清乎

白山集

九

抄寫

左  
五教  
之記

卷之三

西漢

さしもあまきをうなぐおじいのひのれうすのあまくいを  
たすよ西口流を出うて、いざりふ  
りぬもとぢやうじゆくにゆくとばまれ  
しむくとせまちゆうゆうともかくえや  
右もひく戸のあまくままでがよひ免  
てうるをうみうかうゆうひそく  
せれんねのうまくちゆうひそく

百六十九

九  
た

卷之二

卷之三

卷之三

石室文書

九

拾花

五

右

氏數

高  
文

卷之三

石室

權大房却實政

又もひと候候むまゝひりへうのくふまきれ  
右 指か房却 実政

あきてこそまゝあはばまうめこしきにせん乃ち左  
左奇中立家代より北河亡言書奇合也を  
御裳濯奇合アモ廣告せよほぬり又  
えひゆや右奇付送ル 時度多也

石室書

左

定衡

足利高柳葉り書を起くこすりのひうやま  
右 盛長物語

はすよううりねも年代のまくさなほりれ  
左神樂も内竹比冲神樂乃事ノカマヤ  
西平九萬 春詩送  
右

左

正徳

おみ詠も御歌そのわく酒をうきおれとの五代歌  
右

左邊清中納

全を詠ほし、おれどもし翁そくそくおみ春歌  
左、春度れわれおれ方アリテ、右、左、左  
あれどもとくすよおひまく、おれそくら  
くじすいはきくよつとあ  
けと先づくや例れ持もせん

石室書

た

文房

春乃日暮をあわづるの才とく氣やくまなみある是を

右

邊衛

すよくうぢもくして今までかうすとまわらとち  
たは後撰ゆてよりばよきめつねみより  
くとくあくわうあくん紙はれんとゆ  
せれすしてよしむめや右のまこと中將の作  
いふをあくひがすとまこと左のすれとぢうゆ  
れと數すとまくわれりととくちう  
くをかれわすいもとけのまことあればぬ  
かくひく人やあどよしかりよにはまき  
は竹ふちをかきつてくわりしはき  
石七種(書)

た

右薄荷

高まく紹すとまこと左の右のまこと

右

中納言

けりまくそまこと左の右のまこと  
右奇うふまことの筆書きなど紙情ある事  
可とくにけりとくびたれうとううう  
みけりつまて勝とせり

右七種(書)

た

參議

少海をうちはくとまこと左の右のまこと

右

お経

寺中まくとまこと左の右のまこと左の右  
左奇うふまことの筆書きなど紙情ある事

あひ宿すへりまれば事あひゆゑもとを  
絶えとて夕かとひよゆくまみや絶  
ん在すよもじの底ふのゆねせと絶  
はくまき磨きと神りそちと絶  
ゆめくに花らうてなむいそく  
急がれ松かや絶

石七十三

九

左  
江  
下  
竟  
考

洪武

た之前の水を汲む事多し

左を野毛の高木とまくらはきへびの毛も  
をくく羽毛もくわねおわが一筋房まくら組

九

權大納言

春と夏の花事とを記して  
左  
漫之佐仲方卿

卷

花のうきはるのすゑにあはれをほそも本城より  
左近より花のうきはるのすゑにあはれをほそも本城より

石七十九

九

五日のはじからみをわすれやあれよされのちまうゆゑ

卷之二

なすやがもひよそかのうれまく外きれ神乃月す  
まいたまれ日のなまにとうとん右ハ月ノケのを  
じばかと川すもみ一タのねむいばのすもあ  
の御の神とけくらひやけ

石せナ言盡

た

成前宿

喜ば候野ひくすまほ金をもあらきもてく縫を參

右

経清

寺せやまくはまくはまくはまくはまくはまくはまく  
左左今記清の寺とく我身の喜ば候  
きや野ひくすまほ金をもあらきもてく縫を參  
候あはくはまくはまくはまくはまくはまくはまく  
候あはくはまくはまくはまくはまくはまくはまく

候ハ無念おありえ候ふう座初れ又文  
字れとももくらううへこく候ふあや  
お月よと記清をス一神とまつを候きと  
きふとち方とてよのはねれうすど  
りせふ數し候ふうはみづるますてこれ  
候あはくはまくはまくはまくはまくはまくはまく  
候あはくはまくはまくはまくはまくはまくはまく  
葉乃もともも三代集大寺も傍だ多  
うつをとあを左人モヤ候きかれ野ひ  
あれ寺乃中ゆぢにいてすてなも  
都と此經が家すハミホく候ぬめやとそ  
都く候ふ在れ山はまうといじくも

あやあらへはまきくら所さとねちあふ  
まもすりかりい竹のれをせあともひなと  
別ざまれ歌すとようあふへまつりや仍  
又おとげる身の仕竹

石七十七事

左

定衡

松やかねとて翁もむせば翁もせぬ翁乃萬葉

右

盛長朝

なびりぬせうあうにゆくあの老ぬりよると  
左も芸み哥ちくゆひわりすぬりや竹

石七十七事

左

桔光傳政實政

今うる年もいぬもあくねうがくもすり草むるのを

右

大修政

よしのひぬなすまめ翁りくとせうじ比野乃うあ  
妻翁月と雨とね竹ちくとをむそんね竹  
みつまてたれぬとつれとゆくまくす  
かくくや

石七十七事

左

時繁

今うるせまねうとあくぬのをかまう

右

少寧相

竹生ぬれがすが神れうと月とちく竹生ぬれとやとま  
かをとくわせきおほろなま月乃しきまのあま  
ちうくみ竹れとあせかくみうていてな

は勝劣し候ぬあや

石守二番

入道二位

翁やきゆくよどみをかむ月つま

右

桔梗胡

まの翁やまく舞う月をかむもみかぶ中  
右音とたまふを思れちゆめくさ  
あくとてまくらゆるをすり作したすも  
くじくわらむとけねと歌れんとくさ

竹林勝

石守二番

為季鈴

善庵てなむまきやかくまことうひとめぢまく

右

氏數

翁やきゆくよどみをかぶ中  
右音とたまふを思れちゆめくさ  
あくとてまくらゆるをすり作したすも  
くじくわらむとけねと歌れんとくさ  
たすくまくわらむとくさ

石守二番

桔梗胡

右

入室

なむりくまくまくとくさくみえはふれまく  
左歌まやれあまくのゆくくらゆくなとくさ

かくまくちくくふくらむとくさくのゆく  
左守もまくとくさくのゆくくらゆくなとくさ

一束送れぬ御み絵はいづらままで絵無  
アハシトおほく作れと尼寺よりとぞも  
あささぎと作

石子二番目 夏を窓

左

入室

スミ要ぢくこし宿と暮がのむひアヒ家になしけ、  
右

權大納言

アツモトナホト向を暮法乃ミシムニシヒヤホムのニシヒ  
左と暮かりけり右と暮法のたれひ空想、  
くもく比勝方と作へぬめや仍み翁

百十墨

右

以下堺孝

アキハラノ瀬や神アミキの吉方比日乃ドリセテアリ  
左奇ち所わアマキナと後松邊乃奇紙  
ヨリモ作あふやアマキナカツミ松をア  
ヤハミ松かげアマキナソウモソウモアタハ  
たがアキラレ河池ヤドヨウモアカムモアモ  
トシヒビキテ比室ナヨウカヒキテモアカムモア  
松とアシガルアマキナカツミ比室のア  
セチテアマキナカツミ松をアキラレモア  
アマキ松かげアキラレモアカムモアモア  
アキラレモアカムモアモアモアモアモア  
アキラレモアカムモアモアモアモアモアモア

氏教

右

とこほんれどり、遠志のち、酒やかをうみ  
作、西、もとすすめ、されぬ、みあい、  
えませれ、や、あらはめ、よどりて、定家卿哥  
あいかく、ゆき、せ乃くろかみれ、まちと  
みじらか、モレ、あすけ、とくに、をもよみ  
修、め、それ、(あき)、まも、魔や神すまみ  
と、モレ、あすけ、わる、(ま)、魔や神すまみ  
も、あやと、も、も、き、修、れ、も、まし、  
もと、うそ、うそ、ひ、や、修、ん、く、

## 石、金、五、畫

丸

定衛

あさや、あ、か、と、か、と、あ、乃、美、ふ、う、ま、と、あ、か、ま、は、  
か、右

萬成胡

御、ま、月、せ、の、ま、す、ま、は、な、あ、う、ひ、う、れ  
左、夜、枕、一、足、と、夢、有、郭、と、五、月、と、声、共、以、  
纺、纬、似、無、お、も、

石、金、六、畫

大、傍、耶

丸

引、も、今、來、よ、め、あ、や、年、そ、か、う、め、れ、あ、乃、ち、ま、そ  
經、清

ほ、う、ま、神、う、か、う、室、蟬、の、ち、今、乃、弟、も、見、る  
左、右、す、す、す、す、す、す、す、す、す、す、す、す、す、す、す、す、す、す、す、

是、也

百八十七番

左

右鷹狩

ひづりせひもひ乃ふをと妻がう乃乃くひ乃く乃ちうと

右

小室相

あすまひ名はくうきう乃り妻妻夫ふくふく人代がうけ  
た右の寺神社もうく又もうれじよく姫を絆ぬ  
みやるもくとておぐせり

百八十八番

左

西繖

さゑまうとたまうと妻妻夫ふくふく人代がうけ

右

持房

た右あ育共ひめまつておがくとておがくとておがく  
た右あ育共ひめまつておがくとておがくとておがく



ニシテモトモナシハシタマサトモトナシトモトナシ

右 道清

基のとひまつるのよみくもあはれうるわくか志れ先  
左寄と肉筋肉筋かくねとかひがまめたり筋  
かうりゆゑそのあひ乃かきをなりきとと筋せうと  
れりはるやうしとちととととととととととと  
おほくちうめや右寄又うあらせうととと  
すり付をぢかく筋く持せう

百九十二番

左

中納公

なづへやくみのとれぬきりあああとなまく筋せうと

右

奉急

左寄とくふをうつまうつまうつまうつまうつまう  
ハまきとみよや

百九十三番

左

權が傍那室義

ひじまよ先れ松うてとてりすをちぬ袖となう化  
右

權大傍那室義

ゆき流とそひぬ多さをとくうりかがくぬ袖となう化  
左寄とくふをうつまうつまうつまうつまうつまう  
かくぬ袖とみよ月とちまか半よせて二首乃  
たかくくめひや付

百九十四番

左

成前翁

ひづれにうあひれづらうかくまちうを神りまを

右

常秀

うはとひかきそひにしきれまちをはくふれはる  
左ひもろうかくあちきりとひ右ひこくせ  
夢のちくとゆここうとうとくぬかくのほんを  
竹くぬみやゆ又あめ

百九十五

左

典すとうやせすえぞうひよしの男ぢ  
右

為季翁

やいめふくらう鳥雲風そえもかくうねはる  
左寄天承元年内大臣家寄合下源萬昌  
寄ちひせとおひいぢかくふづらはくらひて  
えれしくうりきりとよしゆと博加翁

刻一作り初文文字為寄ぢれうらうみ  
ねむひせうれり左人代事ひすう一と  
トあやとそそげみづけ作れい酒とい  
あびれどもれ寄をかれ左今乃く  
れ此をめばぢり作りまじみやされ  
り先れぬえじせとよしよしもあくいま  
名とすひぢり左のち又おとぢる一ぬ  
更きあえ竹くぬみや又あめ

百九十六

左

盛長胡

ゆき風よいすがくとしなりあきけうぬ中乃ちくと

右

時聲

おもとほうすあせはうひみかまふともやまめはちゆを  
危奇立本あさむるうすくすりときよの筆を  
右はあくらもとてんじれちゆれれなまく  
右え作をとくまうりとや作り

百九十七番 姉別立

左

為事類

あくせわきとがれがちれれにあくらえれ  
右

權力傍駕宣政

川とれいあくのく人を神れき乃妹うせそく  
左奇立あくさくしめくわくめくわくめく  
弟といまくえ作ねとかれ先浦氏比く  
あく浦とくくくくくくくくくくくくくく  
やとをくくくくくくくくくくくくくく

石九十八番

猪

左

持花

石九十九番

猪

右

氏敷

わくとくくくくくくくくくくくくくく  
左立あくとくくくくくくくくくくくく  
とくくとくく婦風くよわくすくは傳めきくは  
勝頃わくすくかくくや作くくく

石九十九番

左

時蟹

かくとくくくくくくくくくくくく  
左立あくとくくくくくくくくくくくく  
成前宿

わきちばなとあつておまかしにあらわすよと月を月

左在たりくあまくこえりの又乃物

二言書

女房

させんとわるまわじもあいすりやまれ風をあまると

右

盛長朝臣

神代事あたわゆりあそく社がまほりあひきみ祭や  
左ハ、うやセシトとまよううけつまよま事  
ときあく行毛も右伏りてかちとゆくや  
はまつまつや

二言一書

左

遊衛

あまぬ事とすがま神あかづまく月をまくみなりとむ

右

右唐書

あるの事はみかとあまうのうち、うそまくまくぬや  
左奇とぢとまく、うなとてとつは  
奇はけづは中左比奇とわく、けづはうや人  
ちとく、つとせ集又は集とぞととわえ  
懐玉や右れちとあまぬかねわは字ニあら  
旅とせう事もありゆくめ不及半と行毛や  
ゆあくく為れよ、けくめ、後日み  
引却けれ、新古今み二傳院源波可阿ま  
ゆく、ゆくとまく、みなり、御くく人れ禮と  
とく、つかれとけり、又おれ字ニあら  
事、五本うち今み源次、奇こりく、みま  
ぬ去比翁セリまく、うらまく、みま

もあく勝みぢきりを拂ち六言書奇合み  
後加口判ナシのよみを書奇合定あ口判ナシ  
不しげ事をミタヤさきに修れナシも学  
為捕ナシもぞれたほどそほの病ナシにニヒ矣  
修ナシも喜撰ナシもは久病ナシや修ナシハ一首等ナシ  
因家ナシ修ナシとテア候令ナシとテア候ナシ二五ナシ來  
とソマニニアル數ナシトナシも傳教ナシ修ナシ  
判ナシには久病ナシや修ナシみぞと雲外ナシとテ葬ナシ  
一首ナシ修ナシ紙ナシやすしとせり歌ナシの帝ナシ  
白ナシを以ナシ病ナシ中ナシ修ナシ建保ナシの奇ナシ  
定家ナシも年ナシと代ナシと以ナシ病ナシ中ナシ全  
あまナシ此病ナシ奇ナシ合ナシとて一詠ナシを以ナシ全  
修ナシとゆナシトナシあに難ナシあに難ナシは却ナシ  
もくナシ恐惟ナシ

二言三番

左

素善

きぬれわき多くあうひの妹ナシうおもナシもすナシ  
右

中納

吉月乃日ナシ少ナシのまナシと云ナシノ北野ナシ也ナシ  
きぬナシのあつナシあつナシ月ナシの奇ナシ  
又ナシれ道ナシ也ナシいとくもひぢりナシと

りし方より是と併せましにあればうら詔  
等々人間の事よりみじかへとてはる  
あちそはれ右はうとうふ難を経ぬと  
又もくきゆうそく御とゆく行ゆゑと仍日  
條乃科あひ下

二言三番

左

大傳都

左  
行しゆれどましわれうちけやまのれ神の  
茂成胡臣

右  
行えり野比主の多御子多為不焼けあわれ  
左はゆきあはれ神左志野比主人比燒  
乃わうきまとうおとおとおとがふ善美す行  
又持めや

二言四番

左

經清

神舞よ遊れがみをあはし乍とあはとゆ乃床此生をゆ  
右  
權七傳教寫我

引ひき去り月をかたる鄰むだわゆる事はすと  
左奇事まれまことなまくうありとと行  
ちりばと是行きと左は奇わゆる事  
御とうるはるは清朗とやう(未とあや)と  
後御とわづれとひづくとばかりてよる事  
やとア人へとゆりし、ととせ禮奇と  
元代(行)ぬまに歌れあらゆ  
がゆふうち左はからう(行)とせゆり

二言五番

卷之三

權方納之

卷

持和胡

二石六書

九

入道二經

卷之三

從之佐仲方卿

たのちく病はなれりうよりて右乃妹を弟め  
むといひゆきうちまことめや

卷七

入室

卷之三

拾房

あやでちどみみつ月とかくれはせすらうんねわら  
たれ等者ゆきひ姫のをもづくるが  
れ、名づくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
ゆづきちとおりて歌れぬあられ等者  
や、まほれにいおとゆり

二石齋

常秀

やうにあはれ神のわざとどうもくわいとほへ様を此

右

小宰相

まくは庭のあまらかをくわや神うあまがむきをくわし  
た、神のわざとくわいとくわいを左へまぬくな  
み、みあまくわいとくわいとくわいとくわいと  
肺腹は因えさうめく

二言九畫

左

正敏

かうゑをすうとくわんちをすうとくのあり月乃月

右

法家堯考

玉帝はくはくとくわんちをくわいとくのあり月乃月  
左奇と源氏多合乃まくはくわいとくわんちをく  
一とくとくとかくとくわくとくわくとくわくとく  
わくとくわくとくわくとくわくとくわくとくわく  
二言三画四画五画六画七画八画九画十画  
んくとくわくとくわくとくわくとくわくとくわく  
りゆくとくわくとくわくとくわくとくわくとくわく  
じくとくわくとくわくとくわくとくわくとくわく  
わとくわくとくわくとくわくとくわくとくわく  
をくわくとくわくとくわくとくわくとくわく  
りせなうあや志作くわくわくわくわくわく  
のくわくわくわくわくわくわくわくわく  
ひ出くわくわくわくわくわくわくわくわく  
多びかくわくわくわくわくわくわくわくわく  
詩序ゆかくわくわくわくわくわくわくわく

うりなく仕事、海鳥はあふがしてはかくれ  
あくまかきのせ仕事と比く乃ち海を  
うきとまきあひゆる、夕れとそれは  
わきうり夕れゆき、うりをひそゆくと  
すいぞし、かくしまむらしみどりて  
陳りさくもねとゆくはるちばまたく  
ともかくくくくくくくくくくくくく  
と作老れうれにおりしもよあらんしゆくを  
れゆきとくうくはるはあらきもかくくく  
とれりす事やゆくとゆく

二百十番

左

左衡

こよみく金井ゆりと青草とくぢとせらひまく乃地

右

左巡房中

ゆきゆく神みだれぬ道志乃病ゆ日れかを志浪

左左せせせせ又おとと

左

左衡

ゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき

右

抄房

痴はくみたの本懶のまんくちうううううう  
左寄かくくくくとくめく歌乃あらゆ  
うとおゆくもくへれくうるみつみていた  
為翁

二百十二番

左

左巡房中

事は、其の如きを、はづかず、中止せし。されば

右

盛長翁

テモヤシメガミノ禊也モハ熊野乃ニシテモトモモサニ  
左寄サルナムナカニシテモトモモサニ  
ナ中ニヨリトヨリサトナカニシテモトモモサニ  
サツサツ右寄モ源ハ禊也モハ熊野乃浦ナシモモ  
ナシモ源清アリムヤモカリモソレヒト初文宣  
テモヤシメトソヒテモカニシテモカニシテモカニ  
トイシトモカニシテモカニシテモカニシテモカニ  
ニモ雅也モカニシテモカニシテモカニシテモカニ

二十三

拾雅

今どうで野々山ちきうのあさ川にむかひれいあやまちれまくらす  
右  
左

卷

萬一人磨長不  
船並及旦川渡

まちがひあくまちくはう勝せり

卷之三

さあちとひそかに乃うなまくこれうがふねとひそかに

右

定衡

風景を喜んでとほくもううやかきてのううなま  
左奇浦リハだりくいはたとくまくやとくも  
ねくとも後多ね流御割衣ゆくのめれい人を青

ちれよううとせと仰れりあふてはひく  
とかま難侍へとおもへ仰りあきとそ  
右れくをかく下向せと使ひまく侍き  
なみ侍へまゆとや仰り

二言十五番

左

常秀

えぬわひあくがのうすよを承るまなまかくまは神  
右

入道二位

むきいき候みばりぬぢくせく神乃おりれまくらうと  
左れくまとせとせとせと右のとせぬ  
仰りながらくまとせとせとせと左のとせぬ  
左勝侍

二言十六番

左

氏教

ませんともゆともまにゆと書あうてうれしき  
右

捨少傍那一家義

えりゆとまく神れよくまくゆと書あうてうれしき  
左奇経はくじうちうかれとけで初句不いそ  
かけあくじ仰りし左奇経はくじあび又  
不いそいりくと仰りし左奇経はくじあび又  
やく

二言十七番

左

拉大納会

まきやかせまきやかくのみ書れあうそのうみあきとそ

右

迎属

まきあくかくまきくをかくうみあきとそ

まくらのよと  
やうめいの  
おひきこも

たすを今はあらう、とほるに霜れありさ  
ぬれあらぬか、とほるに霜れありさ  
まくらのよとほるに霜れありさ  
ほるに霜れとほるに霜れありさ  
やあさひなゆとほるに霜れありさ  
なりゆとほるに霜れありさ  
えぬれんすくいゆとほるに霜れありさ  
よきあらゆとほるに霜れありさ

二言十八首

左

従三位仲方卿

風やまきのれをくまふきぬくのまきのれ

茂成胡臣

ません底生焉紫やか毛アヒトヒリヌキ中乃ニモを  
あ左衣うりよまくもれうみ後涼やちかく  
作りわや

二言十九首

左

持純

まかうとくとくうとくうとくうとくうとくうとくう

時舞

まかうとくとくうとくうとくうとくうとくうとくう  
左ハ曉れかまゆ  
多忙もまよ、まゆるわふううれむとまよ  
るいととそよれりとおれりとおれりとおれり

二言廿首

左

清下堯孝

あれやうもゆまくをなめくとがまぬえ世人の心

右

中納言

多情しうるるのこそ葛は葉はれとくはよぢうす  
丙午比真萬或結送恨於霜下或好侵於風  
前欲等二首得失不及一字廢棄者凡

二首其書

左

泰惠任

ゆふるを野原まきをくわゆかひれすゑのうみし暮

右

大僧都

みりいもむだれぬあらがくわゆかうさうう  
まくもむちれくみもくわま車せり勝負倒

してあき

二首其二書

左

経清

あくぬくまくあれせれをくはもゆまぬ被乃ゆくれ  
換り宿故

右

あきこのたゞれをやあ歎けもし黒村庵とちどきくすくなり

左右其書又あく

二首其三書

左

小宰相

うしめとくとくと病がまくちみくうそ被り宿ぬ

右

成前宿

うしめとくとくと病がまくちみくうそ被り宿ぬ  
みゆれうとくとくと病がまくあすとその草  
く紀免浦くとくとくとくとくとくとくとくとく  
けもだれとくとくとくとくとくとくとくとくとく

左

西歎

なみきづきゑとうれ病ふとむきよがまを

右

入室

いえあ、不承はるうそをかううるふもをめぢみを花  
右奇へええあ、不承とよましのを中ね  
錦風みやと、とたくまく作と大納言  
為玄卿奇みきみあそばゆみてあきし  
いえあ、もねすさまふ山歌れのとよ  
み作とひえあ、もねとつをどうに波  
前らかひや作とおどと奇合  
不因難はる事の左翼れとももまち  
くみ作とや後脚は櫻集なと北和が  
ナされ侍り定家卿ハ既似略今ニキ  
達追述し破はなびうのとくつきよいかと  
竹文永二年比立今ム光後入道をさせ  
ふ公嘉ムアヒハヒハミトウアヒハミト  
チキハナヒハヒハミトウアヒハミト  
ナシカハクハクの等レ白和の百萬石は  
アヒハミト、油ハセカヒハクハクな行  
れ、それはアヒハクハクノモトシハクハク  
左の奇ハクハクノモトシハクハクノモト  
アヒハクハクノモトシハクハクノモト

二言古事記 春述懷

小宰相

かをうてあらはまこととあやしやなかくも

二右

時穀

おうはすふ我代玉をあそびに花をあうてせなむ  
左寄言書寄合事はねようじと  
しれ様のうれしうりあやだまそみわくま  
ゆう郎とけいふあひくあそや左寄身  
とよ文字のびがむのじきと角うあれかち  
五院とくのね原むひてゐる

二右書

左

持房

手写筆をまうれまをくみ山をうせくを  
右 権古納

右寄言書君の荷御趨へ勞を以可有抽賞付  
言狀おれ寄合あられまづてゆゆうな花  
ばげありゆる者とせらふれとやうと付  
めうち経総をすし出へ化作あつたがくは  
是てあつて左比勝かまくれ付をいづらへ  
矣幸みう

二右書

左

持和朝

はむ夷神せくくとわうえひうきくみのまかみ

右 定衡

左角みじてくじはくうはりまかは思ひみる  
我君のにあは帰津汚れほつまくとならず  
ほくろのれあそびうとをまくぢん付を

うあれはなせとてあらすよはみがひ  
といいかひくとすりけり右寄花をくく  
らを年とひ老れ思ひせしとあそんを  
りよりけり勝負をそそめやむ

二言ササ

た

右近房中ぬ

さくちまよせれ乃たくともとれのうに毎日よひゆ

右

近房

ましめの世もる花乃きはは肩にれわよまれ  
左寄花れうき世ひ、といひよいにうへれ  
く作るともうめれ立ゑ家れ本のト風きむと  
とつは寄のうちへよくよきかせよくやあ  
人作りみ右寄と又勝つまびとせまを  
作りぬめや持くことされけり

二言ササ

た

法平堯考

九重とくふをれ花乃かけはうへ道は去れむたまふ

右

入道二位

老えぬまが年うみのまづやうひすみ  
た寄とくふとせれ花れはげとゆる化者のまづ  
あくまづ作り柳葉丸を花送六年と春  
まふ人は作るれ中とて淮人をもよおひ  
うくまづ作り花りとやちりとぬかれむちの  
うみて勒擧とりへりもくじと素浦法まそ  
それあひと六と勢ひうりもやまとりうりけりは  
らんとよむけりけりうみれまくらやあ

うきし右はうこち是れゆふに従は事  
充ゆよをやうを従う

二言世義

左

女房

うきし左は年年娘がみきうぢたく衣よゑんはま

促三宿仲房に

あらわゆ候とぞきう山乃くううきし左は衣候はまくまやう  
左壽はあやし此愚老、速懶此壽不従うり  
あらわとづはん比ぢにやうとあくまく花  
とからうひふうりれそくすく竹う右壽  
もおれうきし左は花うかうあく酒れいろれ  
二言清潔すよしれかくく従候うりれにた乃従う  
けくうせ行う丁そかくくいくあくく竹

二言世義

左

薦拂

なしゆきちだまうをわえんはよたとこソノ見乃下  
權が傍都家義

あらわすうあらゆうに身候と世ゆう風くさうのまきめう  
左はなしゆきちだまうれといひをきて竹う  
在此ありゆふうに身なむと世ゆれと又難うく  
安竹きと左は下うけいなばくらまきふみ従う  
せう

二言世義

左

西激

うはまくめくいとゆくかくみはまくまくまくまく

右

氏教

よをやるよとおどりの身はいとくもあらひのうての世  
たる事が出来ない古今れどもなまく（方）の風  
をむかへてゆきゆきと一時あり（一）（二）（三）（四）  
右寄もひととすか難い（一）（二）（三）（四）（五）  
うみはあそびうちまく（一）（二）（三）（四）（五）

二石  
三集

1

卷之三

右  
權大僕都賓

卷之六

世をもとめてこそ夢の事  
左近先生東北へはり廻もとて此處も言は一夢  
かあくべくうとうとまくみかあくべく左近  
世をもとめつゆやそれ事とぢみていかむ

うやうやしくなれと云つてうやうやしく見  
られと云はれてうやうやしく見られ  
うやうやしく見られ

九

盛長鈞

たとせ茎のなき一ぬけかなくも居てやうめまはれひうり木  
右 成前宿

五

花をまいてちかうも、うそううえ  
左寄原へとわぬいある乃今通う練  
几と思へばやせ居て竹林おひく雨の原  
かやかやりりりりりりりりりりりりりり  
主を仰みやかうとぞ家を書くやうに澤と義  
とす伊川かうくくくくくくくくくくくく

もや右れかとも又勝まことては事の候ぬ  
みちとおゆくゆくしゆく

二言葉集

左

中納之

かのうきよもつましの處今それのみす  
右 持純

えりめくとせ花乃からうがみるも乃まくゆし  
た奇ハ大伴あきうさのとみとあくちふ  
中のそれ乃だけ不原モリアリもとと原  
もなまへー右からむれらの舞モモ  
そよあれ花のそりあくちうつあみまくへ  
ゆくまくわかづはなーつせじや說あ  
ゆみゆくもとでかく思ゆきとそにゆりよ  
竹て勝の字ゆかくいはきゆきゆき

二言葉集

左

大伴都

春よそよれうちは生世中志うめうをやめかがなをえ

右

入室

まほもゆめぬうもくかももゆふがきせねまどせ紫  
左寿ちゆめもとそくちやもなくまくゆり  
左うおうぬゆかくふもとおくくまくゆり  
二言葉集いわくゆきと前は妻の  
右れ作高もおゆくくゆきとあくは弟がすと

志すく在れ勝手がまし竹

二言葉文

た

庚戌胡月

人あらもわしゆるやくよ世中乃よめぐりとやくくひそめぐ

右

奉多義

又あらもわすうの御をせがくせんてうれ世や雲煙そほ  
たかうすりすきは難能ゆうたまくいよくうまうま

あみや

二言葉文

た

丙子秋月

もまよすむ寄はるそのまよすまゆゆきてまよされ

右

經法

神じうあらゆるの世中すりまことひばるまよ

た

乙未秋月

花はるかすよらんと花すよりあはれとひるえちよと  
くさりくひれいと花の又勝負と争せばや竹

二言葉文 夏懷舊

た

壬午春中

あまきこねすとくはうねんむく乃志勝と志高とす

右

時無

はよりかと神まと志ふもんをひくわもしぬみれいと  
たかの奇むかくひくひくともはるはるすと

アシカ

樹れどもとぬありいよすとるばくと  
うじの勢をあふ人みせあとすふゆるあや勝

とゆきをせゆり

二言葉文

九

卷之三

大

卷之三

奉事するを以て也御いと申すと神事多形乃とも云  
左奉事者  
むねに定めはるのかくすなりみそのあそびの事  
虎乃くちのれの神乃くわゆいとくもありふ  
きり左またれやう乃あれひうれ<sub>勢え</sub>指ひまくま  
左

二而罕言

九

清平樂

右  
持和胡氏

右

拾雅

やくすかひきをもとへばあうすまふねれ  
いじそひてまの奇ひひきよゆく人ひりる  
奇ありけととあぬよじとてとおもうよ  
じひりは作例うこうくちひしゆくひり  
なうじゆく、とゆくぬう尾うすみれかえ  
なとかれよのかう乃あすけかりいじく侵  
不まかく修テ、也や勝ゆけ、多く社修

二四

九

中納言

手筋可れもしげが此事ひそむひくよかほ夢をすとる化  
石  
小宰相

深難分視夜々乾勝劣易迷仍持くせり

二言早ニ義

左

成前宿

あはれう神の事ひとにゆかみうぬれ乃喜ちる  
右 大傳教

ひきまがみや神不かすむかうれれと乃一聲  
左右津歌かく作り又持くも

二言早ニ義

左

權が傍教寫我

さめゆきはらめかねてまほれどひくやれひ河口

右 常秀

まくのひき日比雨乃原とたすすとそよよよよ  
左奇ハナガラ盡す今年公徳公奇不わく  
あや右奇ハ津歌作り勝(未かづ)

二言早ニ義

左

為季胡居

麦かりの風淫あいの代(代)のあとうるみ  
右 氏教

むくねりをすわまく郭(郭)なまきが比玉爾の月  
左奇麦かりの玉(玉)乃あ(あ)あ(あ)あ(あ)あ  
ミシロア(あ)あ(あ)あ(あ)あ(あ)あ(あ)あ(あ)  
け(け)け(け)ん右奇モヤ(モヤ)モヤ(モヤ)モヤ(モヤ)  
モヤ(モヤ)モヤ(モヤ)モヤ(モヤ)モヤ(モヤ)

右

二萬里一書

九

迎清

おちまえれども、ハ加れとれども、ハシム  
ヒト

右

經濹

まちもくわみあきらめず草むしりをすれどもまことに  
左の山はあきらめぬかに新そよぎの風の匂

二言罕七書

九

卷之三

左  
入室

卷

入室

ゆくも此處のそぞろくちを詠す  
たかやれ、酒色れうきぬうり——かくぬる年

九

卷之三

うの  
がまくへる  
かまくらもつハカタ

七

卷之二

されぬよかとよひゆるは例もとよりへ  
きれどもあひよそこの一肩のうちあまう  
よくちぢりし袖のゆゑあめや右寄  
そまゆゑうそひしゆゑひそむらわら  
おほはるゆゑうせひとゆゑひそ  
きり世に事と典籍のゆゑうてよひを  
をととすとゆゑほりの事ありやくく紫  
玉や、うおもひおりくおもく

二石早八事

拾房

夏草乃江と空氣の如きは勿論也、おひげあらじ野草等乃秋

右

從三位仲房卿

あまがはれももの望とうしゆい名うけ乃ちあれ  
左右口等へりかよじておめざり

二言早々盡

左

持絶

聖母代也あぢすすまておめざり

右

入通ニ位

あらむせの神乃まくとおめざり

又カ翁

二言早々盡

左

檜大房郡實政

あらむせのじがおめざり

右

西徹

多くはるかとおめざりのやの神や焉幸  
左奇初み文字あともなまづら出紹ふあれ  
おれまかぬや右奇三定嘉卿四又タクハ  
づきれ雲のなまづらとそれくら花すか  
勢れやくと作すわたり黒ひゆき

二言早々盡

左

左唐経

やくえりや身を手とおめざりをあめざりを左唐経

右

定漸

神うちか處を手とおめざりをあめざりを左唐経  
左奇もよのれとつあめざりはまわはば  
多くはるかとおめざり

御とせり

二言幸ニテ

左

權大納言

幸まふとくに道をひのきをむすてたま庭れちのあま乃家ま

右

慶長船臣

家は風はまよ風と吹むうとまよとまよとまよの風は  
左の庭川みまよびらへたまえ家は風と風を被

をよせくらうとまよとまよとまよとまよとまよ

二言幸ニテ

秋神祇

左

中納言

おとまよとく月のやまとく神をじつやねしめし

右

左衛門

風とくまひうをまよふ風と月とまよとまよの婦乃神

左

右

たゞおとまよれもくを思ひゆく左今は岸れ  
おとまよれもくい竹ふみや、とれく竹  
右もみよくの婦乃神ゆき又せくは難免努  
ね

二言幸ニテ

左

中納言

婦乃神ゆきの神とくちのうりうそくまよとまよ

右

中納言

かまゆみ油をすうすけくまよとまよとまよ

右

中納言

かまゆみ油をすうすけくまよとまよとまよとまよ

右

中納言

かまゆみ油をすうすけくまよとまよとまよとまよ

二言五十九章

た

卷之三

小宰相

卷之三

小宰相

以がる所を肴めにまちみちの様に縁より是れども  
左の事務所 仍る持

九

大清郵

右

戚家廟碑

さうもじよせれ妹の妻かでまくらぬのつゆれとぬえ  
たすくしのれ山のすらうるんくみよそ  
すりそやくまくまくといふとくくいひよ  
くくもゆゑをくわくくくくくくくくくく  
れりみち不側はあ用とやくくもみや  
くみ深城とあくすくま思ひをもく  
くもゆゑくくくくくくくくくくくく  
くくもゆゑくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくく

九

卷之三

ゆき草の緋をひくとさくらの  
ぬ由代は月よみのや

一  
清衣

卷之三

まゝお市はお詫びをしてくらべ婦れめをみだりて帰らせ  
たが、後後撰集にて云々と云ふ事、いつうつす  
う代代承てましむが、あつまつ月より  
北嶺の竹多めあひゆも葉も紫も青も  
人手りあひつゝあれやうの事、足り  
候ひし。右奇、五月の仲始例幣の事  
也やまくひととぞ此婦れめにせざといふ  
はまく左比奇よりうちまくよしとせ  
右角勝とせざきゆ

二言辛巳書

盛家鈔

神宮山内からさかみ加子不也姓あう日向守がまこと本  
衣  
荒成野屋

卷八

卷之三

御内山内へすのなかみ不モ婦あう日は事あまきう  
右  
萬成翁

二十九

左 桂少傍都富我  
あさひのむすめをそぞろにねりておひづれぬる神乃日升

右

權力廢政宣改

此うすな角すふかくちのあはれをあくかまをあまき  
左奇才三多もあすりわすれへくまく  
竹れと神乃月を以て主治のいや思せき  
竹り左奇猿をかけをあまぬきハ神ちゆの  
きほこゆやひかくかねははうがをやうめの  
れもありく里の比月竹をみすまうと  
竹

二言平義

左

氏教

蟹そや神そまきんをあめとす月みは神乃まくを  
右

為事相

喜自守り角月の用うげくまくは帰うそすやく  
左右奇おがくやくすけうけよつて喜ゆま  
くつよりあくよし勝ゆそくゆくせたばく  
奇合れすり神威威勢は辛うと圓承の  
度乃奇合みかくくいすく免おほせきくめや  
けゑひ、神祇の教うるうきよつめどくふら  
へ

二言平義

左

正徳

鹿そあくは角月の用うくみもあくめ神祇  
入通二位

さうめ等をもくかくでかをうみをもくみちや神祇  
左八情のすとれるゆきへきくまけひまく  
ゆくとけれいまくあひてやまく竹くろ

と放て禽そぞと延びたりけりす。准せし事  
之度をとせり。仰れはもとよりあま  
く。仰あゆや前妻めどこれ有社はひ  
候く。まゆからみゆうり仰れ。そのみだふう  
へた。うそもども。まゆく。まゆく。仰れか  
く勝とくわらへり。

二言六十二番

た

狂歌

あやあや神代鬼うくすりるき。あらえきのむ乃と背  
右

左

えもよのうとひゆきをはやする月を神代く。あらえき  
左

右

左

左

入室

ちまほ世乃姫なまく。まよ御。ひやまね乃姫うけ  
右

持房

あらひゆく。神代ひゆく。まよえきの裏乃すまち  
左。海世の姫とねれ姫。うそ。左。神代れい  
りを。石葉乃あさりゆく。まよえきの御。うそ。左  
あ。とよかくやうく。

二言六十三番

た

持純

かまふ空のあはれ。かまふ空のひく。姫乃ひく。

左

常秀

をほの神代は姫。あまのあま紀月。松原をか  
左。左。あはれ。ひく。ひく。ひく。ひく。

二言卒立事

た

時驚

ひりを神代より余をうへ取らるのいふ婦代の月

右

女房

名はそひりがまひと努子とすめ月みはすを  
在奇の月よりみのあそびにめりまた沙汰乃紹つし  
又ちてそぞりといふ姓たんじよみ件事生  
五細りとくらばゆきとくらばくことせこりうの夫  
ぬあまうどくやううかくも竹子て在れ  
傍かばくも竹子ぬ

二言卒立事

た

迎浦

婦子せねやまとくらまよ乃ねをれをもふそく

右

泰翁社

魚思葉代より娘を神代婦とすめ事す  
たゞ年少されねをせれうとあくつて右の事  
て、れ葉代乃婦代ありてうすみ事能事す  
むう乃物也

二言六十七事 神狀

た

大房郡

多手てまほの通ひゆくしめくはうめふゆき比やまへ

右

正徳

春日井や嘉祥はとくわちくまもとてのう達の致う政  
たゞものまる、年乃ちとつて右の宣福  
の維摩倉庫を用三國といふ事とよしゆめやまと  
りあくまえゆき右の江うなと云額



而朝之以德則無不進也

卷之三

二  
百  
六  
十九

九

卷之三

弟ともうまきかきわらはせをえぬ  
左 盛衰治左  
カツ 那

卷八

感言集

左角ありては少くも主に(多<sup>シ</sup>)いふ優秀シテ

言れど何よりもかく、作者は見解をもろ  
きともうけられと志をらゝ尋ね道みへ達  
磨家<sup>1</sup>や、やうな中には、みぞへ駕籠車  
の竹馬車よせて左近勝<sup>2</sup>定められた所  
の竹馬車

二而七子書

九

卷之三

江蘇常熟人。字子雲。號南軒。官至刑部員外郎。著有《南軒集》。

七

持和胡氏

六とせくつよめのれをとらむる御神りぬまやかきし  
たるすす明星墨を起て出山是明星乃時御  
をよみあめやうち中すち事ひを比御成  
まつて六とせくつよいはまゆ御神を  
あくこほりりかく御乃く御うま  
せふらをせうとくはまくとくをあくま  
御とくめらき作

二万七十一事

九

持房

おはまつありあらひに雪をもよしやせすのう乃通奉

二右

從三佐仲方口

雪の中不ふかみあくまみ瀧れ神ありてあきみつむし  
たれまゆるてゑくうこもといまい名づ  
かひや左若ちふくら下神ありてまき  
いわれとよもあらやナウカトもあきみつむ  
今れ神アリモつてれといふとまく作り

二右手二番

六左

入道二位

六右

入室

えねえのまぬまよそてうるまれが乃ナセ一志清  
左寄波のそアサヒアレキ鶴林に枯樹と  
たすふや又功達林れちめうりーく、あさ  
し、とおひけり右寄、とあくらる事  
も竹くわやちきと持くまくまき

二右手三番

六左

權右納去

さゆふやもむら月あらそとこうがむよあれき

右

拉サ傍都室義

まよひぬまくわれやなまくまくのほくうわく  
右せうい氷うれ紫天右はい門ややとをく  
ろくも竹うれ岸の川慮是れめ及くれ  
あくく清風とくわく竹

二右手四番

左

權右傍都室義

朝雲暮雨の事の如きはねど乃もさうぢやう

右

お絶

えわぬあれむとねれ原もとと方のはすもとうる  
たすハ世間相常往來のあや翠竹苑、花木  
くくもかゆくや半れけれひきつねね  
は神つるすやア行くしきれみおとのみ  
けよりゆくしよいこやしたれ猪子なまれ  
ゆき

二言車あま

左

氏數

せす乃はねをまきやん

右

為義翁

左すすみちのとづか初とぬ板めまく  
けうそもて比例もゆく右奇書もと  
すそもつみはとゆまとゆふハ脚時識器乃  
今もあてまくは頬もとまや

二言車六裏

左

時禁

あもまよまき社アモアヤカミアモアヤク

右

常秀

あもアヤタナツ御前もと  
たすハもチヒトハうちまののとくいははれも  
事常社神のあきやをもあ新勅撰  
集より入りありもが衣裳の玉みはらもと  
が御もあらわゆりとあれ社事一

ちふ難よハ往ふまへまみや右寄ハ衣笠内  
府寄みあそれむんれのい川よりうるま  
ありのものとひそひとゆふありしと思ひ  
出ゆれとんれのわくへふまへいぐらひ  
うりとととなくようみゆくまへいうさぬとれ  
書くとおくげゆめらまく

二言手書き

左

成前布称

かもくのはまくまくも書ゆし三世れびけの爲めまく  
右

左邊情中ね

かひれ月あねむす乃あり賣みう、自記とまははまと繁  
左寄乃寄ニ向まよくしむらを右寄古文  
屋ありすふう寄神右月時々うとまは  
の葉れ名めねむす乃あるまもとあ生と繁  
うて総慶今の中みくさんゆふいとね  
くとゆふかんむれい右比寄かちゆひ

二言手書き

左

文房

海きなび草も一連志紀もと二月の廿日あまく

右

文房

春よまゆめにむとまくあめにまくまく年比れ  
左寄の草乃むくゆうあめとすくとく  
うくしれりいほくふやあくべ土月方日  
天名多若ち寄れ毛日そくそく日日あくら  
てち竹を慈惠れよみ竹の寄多れかみれす  
升乃庭すすあまくくまへまみせひゆま

やあくらんと竹を以て後拂ア及候  
すヤリ作アハマシモアヤシム勝  
れ事無ゆアレ候

二言七十九畫

左

中納言

都御所御事の口名ハ三事社との通を失フ今そなま  
右

素萬代

はのふ我身をなまく是れも又スミル事かアテキモア  
左

左ノホヘアキナキナモホヘキナモ

二言八十九畫

左

法下亮春

左ノモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモモ  
右

右萬代

さううえのひのあきあきあきあきあきあきあきあき  
左奇アア義院の文ム獨如室華従室而有  
幼華難滅室經不懷といほんや右ノモモ  
此の蓋也乃ク此水加比内井此奇ホカモヒサ  
モヤシクアキアキアキアキアキアキアキアキ  
中納

寃政二庚戌冬霜月十九日長寧夏新宇

同上二日於十歸院校合平

以朱

李堯

